コミュニティスポーツの振興に関して(V)

——スポーツ指導者の目標と住民の意識差——

平　松　　携

I. はじめに

本稿は、コミュニティースポーツ振興に関しての継続的研究[1,2,3,4,5]である。

地域スポーツを振興するには、指導者、施設、プログラム、仲間、情報が重要であると考えられ、その研究も進められてきた[6,7,8,9,10,11,12,13]。

指導者の定義を考えてみると、古畑[14]は、集団の中である特定の地位、位置、ポストを占めている人、集団成員の行動の焦点となる人、社会測定的地位で人気のある人、他の成員より多くの影響を及ぼす人、集団全体としての遂行、業績に及ぼす影響の程度の大きい人、リーダーシップの行為に従事する人。岡堂[15]は、集団目的達成のために、再方向づける役割を果たすのがリーダーである。リーダーとボスとの大きな違いは、リーダーが人びと自身に、"自分にこの集団にとって必要とされているかけがえのない存在なのだ。そして、この集団のために役立っているのだ。"と感じさせる努力をしている点である。大橋[16]は、集団生活において中心的な役割を果たしている成員がリーダーであり、リーダーの機能がリーダーシップである。大橋[17]は、集団の統一を保ち、その成員が行動するにあたって、彼らの方向づけを与える役割をになう人物。また伊藤[18]は、集団の目的達成せしめんがために集団の構成員として一緒に仕事をさせ、能率を上げさせようとする人物といっている。このように指導者の概念は、必ずしも一定しているわけではないようである。

地域スポーツの指導者を金崎[19]は、公共的指導者（体育指導委員、公共体育施設の指導者、教育委員会体育指導担当職員）と民間指導者（スポーツ指導委員、スポーツ少年団指導者、スポーツ団体の指導者、レクリェーション関係指導者など）に区別している。

スポーツ指導者の先行研究では、金崎[20,21,22,23]、沢田[24]、杉本・条野[25]、犬飼[26]、山本・中島[27]、木村[28]などがある。

スポーツ指導者が実際に指導する指導場面において、社会学的視点から説得力のある具体的な指導は意外に少ない。これらの研究はこれからであるといえよう。スポーツ指導者は、例えば体育指導委員、スポーツ指導員、学校の教師、体育協会の役員などは、具体的な指導場面において、地域住民にどのような指導目標を持って指導にあたっているのだろうか。また、地域住民は、スポーツ指導者にどのような指導方針を持っている人に指導を受けたいと望んでいるのであろうか。本稿は、スポーツ指導者の指導の目標と地域住民が求めているスポーツ指導者像に視点をあわせ、両者間を比較することによって、スポーツ指導者のあるべき姿を追求する。

II. 方　法

スポーツ活動の範囲を広くとらえ、学校教育活動の範疇で実施されるスポーツや、学校教育活動以外の地域・職場でのスポーツ活動をも考えた。スポーツ指導者は、学校教育活動の場面での指導者（教師）、地域、職場での指導者を含めている。したがって、教育職員免許法による教師、民間でスポーツ団体の有資格者、地方公共団体から任命された者、スポーツ資格を有しないか何らかの形でスポーツ指導に関わりを持つ者などスポーツ指導者として考えた。しかし、本稿は、地域スポーツの振興としての視点から地域スポーツ活動に重点をおき、学校教育活動内の教科として体育の授業でのスポーツ指導は除外した。

1. スポーツ指導者像の説明モデル

金崎[29]は、社会体育指導者の社会的機能の説明モデルをあげている。

それによると、組織、物的条件、プログラム、住民をあげその指導行動に影響を与える要因に主体的要因、社会的要因、環境的要因を掲げて説明している。

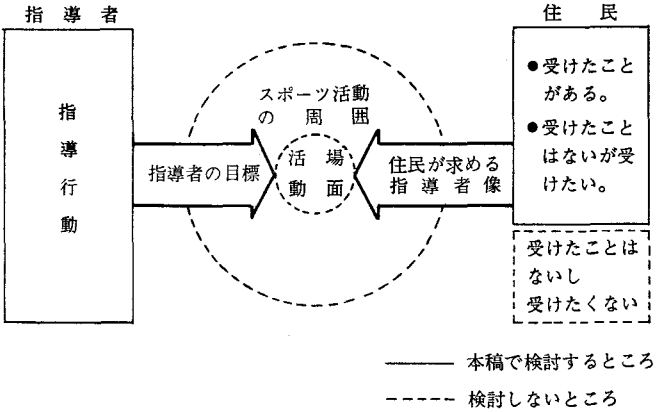

図1　スポーツ指導者像の説明モデル

図1は、スポーツ指導者の指導目標と住民が求める指導者像である。スポーツ指導者の指導行動は、スポーツ活動場面ばかりか、その周辺の活動要因を含む広い範囲に示すものである。つまり、地域や職場での指導へのかかわり方、スポーツ指導対象者、スポーツ活動頻度、スポーツ経験などが含まれる。住民のスポーツ指導行動は、指導者にスポーツ指導を受けた者（以下「被スポーツ指導経験者」という。）、スポーツ指導者に指導を受ける気持はあるが機会がなかった者（以下「被スポーツ指導無経験者」という。）。指導者にスポーツ指導を受けたことはないし、今後も指導を希望しない者（以下「被スポーツ指導否定者」という。）の3つのタイプが考えられる。しかし、今回は、被スポーツ指導否定者については、紙面の関係上割愛する。

スポーツ指導者の指導の目標は、「基本的技術」「スポーツの楽しさ」「ルール・マナー」「人間関係」「ある程度高度な技術」「スポーツ以外の

世話」の6カテゴリーとした。また、住民が求める指導者像も同様な6カテゴリーとした。

2. 調査方法と対象者の概要

この調査は、広島県教育委員会が広島社会体育調査研究会に「広島県のスポーツ振興とスポーツ施設、環境整備のあり方」を委託研究したデーターから抽出したものである。

スポーツ指導者調査は、1981年10月に実施した。調査対象者は、広島県内の体育指導委員、スポーツ指導委員、スポーツ少年団指導者、中・高等学校体育連盟役、スポーツ行政担当者、コーチ・トレーナーなどの1,100名である。質問紙郵送法により有効回答は、672名（有効回答率61.2%）であった。

住民意識調査は、1981年8月に実施した。対象者は、広島県下18歳以上の男女、市町村の対象数は、87市町村の人口の比率とした。市町村教育委員会に6,000部配布し、有効回答数は5,042（有効回答率84.0%）であった。スポーツ指導者と住民調査の年齢、職業別など分散し対象者としては妥当である。

III. 結果と考察

1. スポーツ指導者の目標と住民の指導者像の概要

スポーツ指導者の指導目標は、スポーツの価値観、スポーツ・運動の動機づけなどによって多く影響がある。また、被スポーツ指導経験者、被スポーツ指導無経験者によって、そのスポーツ指導者を求める指導者像も異なる事が予測される。

スポーツ指導者のスポーツ指導行動の現状をみると、指導経験年数では、5～10年が中心であり、年齢的には5～10年経験者には20～30歳代、20年以上には50歳代以上が多くなる。

スポーツが人生においてどのような関わりを持っているかというスポーツと人生における価値観をみると、「スポーツと人生」を切り離している

者が全体の4割である。その内訳は、若年層より高年齢層に多い。また、「スポーツの勝ち負けは、人生の勝ち負けに通ずる」というスポーツと人生を同一視する考え方は、50歳代では4割にも達し、若年層には少ない傾向がある。このことは、スポーツの価値観と人生観とは別であるという若年層と、同一視する熟年層との違いがあるといえよう。

一方、被スポーツ指導経験者の行動を見ると、スポーツ活動の目的では、被スポーツ指導経験者と被スポーツ指導無経験者と比較して、被スポーツ指導経験者の方が高いのは、「運動不足解消・健康・体力を高める」「仲間づくり、人間関係」「ベストを尽くし充実感」などであり、被スポーツ指導無経験者の方が高いのは、「気分転換、ストレス解消」「つきあい」である。この両者の間には0.1%水準で有意差が認められた。

表1は、スポーツ指導者、被スポーツ指導経験者、被スポーツ指導無経験者の求める指導者像である。

表1　スポーツ指導者と住民の求める指導者像

(%)

区分 ＼ 指導者像		基本的技術	スポーツの楽しさ	ルール・マナー	人間関係	ある程度高度な技術	スポーツ以外の世話
スポーツ指導者	N＝664	34.7	30.7	20.1	11.7	1.8	0.8
住民 被スポーツ指導経験者	N＝1879	19.1	38.4	10.5	20.6	7.0	4.4
住民 被スポーツ指導無経験者	N＝1230	9.5	41.5	9.8	28.4	2.7	8.1

P＜0.001

スポーツ指導者は、基本的技術、スポーツの楽しさ、ルール・マナー、人間関係、ある程度高度な技術、スポーツ以外の世話の順である。

被スポーツ指導経験者は、スポーツの楽しさ、人間関係、基本的技術、ある程度高度な技術、スポーツ以外の世話の順である。被スポーツ指導無経験者は、スポーツの楽しさ、人間関係、ルール・マナー、基本的技術、スポーツ以外の世話、ある程度高度な技術の順になっていて、この3者間

には0.1％水準で有意差が認められた。

スポーツ指導者は、スポーツスキルの実技指導はさることながら、スポーツ指導場面において実践する場合の規則、約束ごと、試合でのマナー等をも当然必要になってくるため、実技指導及び教育的指導は住民より意識や関心が高い。

一方住民は、スポーツの楽しさでは、人間関係を大切にする傾向が強い。また、ある程度高度な技術、スポーツ以外の世話をしてもらえる指導者も要望が高い。

望ましい指導者像の観点から考察すれば、基本的技術を重視するのでは、実技指導に携わっているスポーツ指導者が熱意を持ち、被スポーツ指導無経験者は、指導者から直接指導を受けていないために、それ程基本的技術を重要とは考えていないようである。スポーツの楽しさを重視する人を求めるのには、被スポーツ指導経験者にスポーツの楽しみを指導者に求める者が高く、スポーツ活動そのものの楽しみを与えてもらえる指導者を求めている。ルール・マナーを重視する人は、スポーツ指導者は、教育的効果をねらったり、試合やゲームに必要な態度、言葉づかい、服装、施設利用、対人関係に至るまでの世話に気を配っている。被スポーツ指導無経験者は、ルール・マナーに対する関心は低く、一般的にはマナーが悪いという表現もこのあたりから出たものであろうか。人間関係を重視する人を望む人は、被スポーツ指導無経験者に多く全体の¼に当たる。日常生活において、人間関係を円滑にすることを指導者に望んでいる。これは、スポーツ指導者が目標としているより、住民が2倍も多く望んでいる。

ある程度の技術を求める者は、被スポーツ指導経験者が最も望んでいる。実技指導場面で現在よりも高いレベルの指導を受けたいと願望している。これは、被スポーツ指導無経験者より多いが、技術水準の高さはこの調査からでは明確ではない。スポーツ指導者は、実技指導にウェイトをかけているが、基礎的技術からある程度高度な技術のレベルアップをねらっている者は住民よりは少ない。このギャップは、住民にスポーツ指導場面にお

いて学習意欲を十分に満足させているのであろうか。

スポーツ以外の世話を重視する人は、被スポーツ指導経験者と被スポーツ指導無経験者に多く、スポーツ以外の世話にも手をさしのべ、耳を傾けてくれる指導者を望んでいる。しかし、スポーツ指導者には、荒井[30]のいうコート外までの日常生活における世話まで関心は高くなく、コート内とその周辺までの付き合いが限界である。

2. スポーツ指導者の指導目標

統計学的に x^2 検定の不可能な標本数（4以下）は、本稿の対象にしなかった。そのため、基本的技術、スポーツの楽しさ、ルール・マナー、人間関係の4カテゴリーとし、ある程度高度な技術、スポーツ以外の世話は、やむを得ず標本数不足により除外せざるを得なかった。

(1) スポーツ活動目的と指導目標

スポーツ指導者のスポーツ活動の目的は、「運動不足解消、健康体力を高める」31%、「仲間づくり・人間関係の改善」29.7%、「人間形成・精神力を高める」10.7%、「気分転換・ストレス解消」9.5%、「生活の変化をもたせ生きがい」7.6%、「ベストを尽し、充実感を味う」4.5%、「スポーツ好き」3.4%、「技能を高める」1.8%、「つき合いや社交を楽しむ」0.4%、「その他」1.3%、の順である。

これを年齢別に見ると、「運動不足・体力を高める」は、20・30代より中・高年齢者に多い。「仲間づくり・人間関係の改善」は、各年齢層に分散している。「人間形成・精神力を高める」は、50～60歳代にやや多い。「気分転換・ストレス解消」は、中年・高年層より20・30歳代に多いことがいえる。

スポーツ指導者と住民とを比較して、指導者に多いのは、「仲間づくり」「人間関係」「生活の変化・生きがい」「ベストを尽くし充実感」である。一方住民に多いのは、「運動不足・健康体力を高める」「気分転換・ストレス解消」「つき合い」「好きだから」である。この両者間には0.1%水準で有意差が認められた。このようにスポーツ指導者のスポーツ活動の目

的は、スポーツ指導者間の仲間づくりや地域スポーツ活動における人間関係の円滑を目的とする者が多い。また、住民のスポーツ活動目的では、気分転換やストレス解消とする者が多い特徴がある。

表2は、スポーツ指導者のスポーツ活動目的と指導目標のクロス集計である。

表2　スポーツ目的と指導目標　(%)

スポーツ活動目的 ＼ 指導目標		基本的技術	スポーツの楽しさ	ルール・マナー	人間関係
気分転換・ストレス解消	N=63	27.0	41.3	20.6	11.1
仲間づくり・人間関係	N=196	27.0	30.6	24.5	17.9
生活の変化・生きがい	N=49	28.6	34.7	26.5	10.2
運動不足・体力向上	N=206	38.8	35.0	17.5	8.7
人格形成・精神力を高める	N=69	49.3	11.6	24.6	14.5
全体	N=583	34.0	31.4	21.8	12.8

P<0.005

スポーツ活動目的でみると、「運動不足・健康体力を高める」ことをスポーツ活動目的にしている指導者は、基本的技術やスポーツの楽しさを指導目標にしている。しかし、人間関係を大切にすることを目標としている人は少いことがいえる。「仲間づくり・人間関係」をスポーツ活動の目的にしている指導者は、スポーツの楽しさや基本的技術の指導はもちろんのことルール・マナーや人間関係を大切にする指導方針を持っている人が多い。「人間形成や精神力を高める」ことをスポーツ活動目的とした指導者は、基本的技術を指導の目標にしている事が指摘できる。また、スポーツの楽しさを指導の目標とする人は少ない特徴がある。これは、実技指導を中心とし、身体的訓練から人格形成を目標とするもので、スポーツによる身体的訓練により精神と身体のバランスを保ち人間形成へと進むことを目的としているといえよう。「気分転換・ストレス解消」をスポーツ活動の

目標とする指導者は、スポーツの楽しさを求めることを指導の目標とする。一方、基本的技術を求める指導者は全体より少ないといえる。管理化された社会や、通勤・通学に時間を費やす生活で、精神的な疲労感を身体的活動により一時的ではあるが開放感を味わえることにより指導のねらいとしている人もあろう。「生活の変化・生きがい」をスポーツ活動の目的にしている指導者の目標は少なく、これという特徴はみられない。

スポーツ活動目的が身体的効果を目標とする指導者は、スポーツ技術の向上をめざす傾向が強い事がいえる。また、社会的効果を目標とする指導者は、人間関係を大切にする傾向があり、心理的効果を強調する指導者の目標は、スポーツの楽しさをねらっている。一方、精神力を強調する指導者の目標は、平常のスポーツ訓練の中から強い意志力を養成することを指導の目標としているといえる。

(2) 指導への動機と指導目標

スポーツ指導者には、指導者になる動機は多様であるし、いろいろなタイプがある。

スポーツ指導者になる動機では、「スポーツが好き」(35.5％)、「青少年健全育成・社会奉仕」(17.5％)、「スポーツ経験を生かす」(17.0％)、「推せんされて」(14.3％)、「職場のしくみ」(8.7％)、「選手を育ててみたい」(9.2％) の順である。年齢構成でみれば、「青少年健全育成・社会奉仕」が動機の指導者は、指導者の子供が中学校、又は、高等学校に就学している年齢40～50歳に多い。「職場のしくみでやむを得ず」の指導者は、スポーツ行政担当者に多い傾向がある。これは、任命権者からの辞令で、自由意志によるものではない人もある。「スポーツ選手を育てたい」人は、20・30歳代で、若い年齢層に多く、高年齢層になるに従い減少する。また高年齢層になれば、実技指導場面での指導活動から遠くなってくる。

表3は、スポーツ指導活動への動機と指導目標のクロス集計である。指導活動への動機をみると、「スポーツが好き」では、基本的技術、スポーツの楽しさを目ざしている人が多い。「青少年健全育成・社会奉仕」を動

表3　指導への動機と指導目標　(%)

動機＼指導目標		基本的技術	スポーツの楽しさ	ルール・マナー	人間関係
青少年健全育成・社会奉仕	N＝102	30.4	28.4	26.4	14.8
スポーツが好き	N＝206	35.0	35.0	18.4	11.6
スポーツ経験を生かす	N＝99	56.6	18.2	20.2	5.0
職場のしくみ	N＝51	29.4	41.2	13.7	15.7
選手を育ててみたい	N＝42	38.1	28.6	21.4	11.9
推せんされた	N＝84	25.0	34.5	27.4	13.1
全体	N＝584	36.1	31.1	21.2	11.6

P＜0.005

機とする指導者は、ルール・マナーや人間関係を大切にする。一方、スポーツ実技指導での基本的技術の向上をねらいとする指導者は全体より少ない。「スポーツ経験を生かす」を動機とする指導者は、指導者個人が経験した種目のコーチをしている事象から基本的技術の傾向が強い。その反面人間関係やスポーツの楽しさを大切にする指導は全体よりも自己の経験を生かす事は、スポーツ技術の向上を住民に求める結果となっている。「推せんされた」を動機とする指導者は、~~ルール・マナーを~~ルール・マナーを教えることが全体よりも多く、スポーツの基本的技術はあまり指導しない傾向である。「職場のしくみ」を動機とする指導者は、スポーツの楽しさが多く、基本的技術を大切に指導する指導者は少ない。「選手を育ててみたい」を動機とする指導者は、全体と比較してほぼ同様な傾向を示している。これら指導への動機と指導のねらいとの間には統計的に0.5％水準で有意差が認められた。

「スポーツ選手を育てる」や「スポーツ経験を生かす」の積極的な動機とする指導者は、基本的技術を指向し、より高い技術をも指向する指導を追究していると考えられる。このタイプの指導者は、競技的スポーツの経験者が多く、競技で勝敗を求める傾向がある。また、動機が職場で任命されたり、推せんされてしぶしぶ型の指導者は、スポーツ技術の向上のため

の基本的技術よりもスポーツの楽しさや人間関係を求める指導者をめざしている。一方、「青少年健全育成・社会奉仕型」の動機で指導者になったタイプは、子供会、町内会など地域内での何らかの関わりを持つことになって、世話をしていることから、ルール・マナーを教えたり、社会生活で人間関係を大切にする指導を目ざしている傾向がある。

(3) スポーツ指導への関わり方と指導目標

スポーツ行動への関わり方には、監督やコーチのように実技指導中心の者もあれば、大会の企画・運営をする者等、いろいろな役割を持っている。ここでは、地域との関わり方について考えてみる。

地域への関わり方は、「監督・コーチ」47.3%、「体育協会や競技団体の運営」27.2%、「スポーツ行事や大会等の運営」9.6%、「クラブの部長・マネージャーの世話役」8.3%、「広報活動や参加者集め」3.0%、「有識者としての会議に出席」1.7%、「その他」3.0%である。

このような地域スポーツへの指導者の関わり方は、実技の指導としての「監督・コーチ」は半数であり、半数は裏方さんによって成立している。

スポーツ指導への関わり方と満足度をみると、満足度の高いのは、学識経験者として会議で意見を述べる人や競技団体や体育協会、他の社会教育団体を代表しての立場の人々である。また、実技指導やルール・マナー等、スポーツ活動現場に直接関わりをもつ監督・コーチの満足度も高く、試合や大会でゲームに勝てばある程度評価される。評価としては低いものに、「広報活動や参加者集め」の裏方の役割を果たす人である。地域スポーツでは、決して表面に出ずプログラムの広報や参加者集めに、夜間でも家から家へ依頼に足を運ぶ苦労があり大切な役割ではある。しかし、満足度は低い。また、満足でも不満足でもなく、どちらでもないと、スポーツ指導者であるという意識をもっていない人も多い事は事実である。それは、広報活動や行事・大会などの人集め役は、町内会・体育協会・子供会など、地域の自治団体の人が多く関係しており、その団体役員の団体に対する帰属意識は高くはない。順番や当番であるから本年も昨年同様に世話をする

という消極的立場からの役割意識を持っている人も少なくない。小学校のP・T・A活動でスポーツ大会をする場合、学級の父兄に電話し、出場依頼に廻るのは1例である。父兄も依頼があれば迷惑顔をしたり、参加を断われば他人を依頼して歩くことになる。世話役でも人集めの世話役の評価は、個人はもとより他者もあまりしないのが現状であろう。

表4は、スポーツ指導への関わり方と指導目標をクロス集計したものである。

表4　指導へのかかわり方と指導者目標　(%)

関わり方＼指導目標		基本的技術	スポーツの楽しさ	ルール・マナー	人間関係
監督・コーチ	N＝304	44.7	24.7	22.0	8.6
部長・マネージャーなどの世話役	N＝55	38.2	32.7	12.7	16.4
体育協会・競技団体の運営	N＝175	33.1	31.4	21.8	13.7
スポーツ行事の企画運営	N＝61	14.8	52.5	19.7	13.0
広報活動・参加者集め	N＝24	20.9	37.5	28.8	18.8
全体	N＝619	36.9	30.6	20.9	11.6

$P<0.001$

「監督やコーチ」は、実技指導が中心になるため、基本的技術が重要になり、スポーツへの勝利が評価の対象となる。その反面スポーツの楽しさや、人間関係にも関心はあるが実技指導まで関心は高くない。「部長・マネージャーなどの世話役」としての指導者は、スポーツ活動の補佐的役割を担うため、人間関係を重視する。また、ルール・マナーを教えるところにまで関心は高くない。「体育協会や競技団体の企画・運営」に携わる人は、実技指導に関与しているチーム・団体の代表者等を含まれていると考えられるので、基本的な技術に指導のねらいが多いと思われがちであるが意外と少なく、人間関係をねらいとする指導者が全体より多い様である。「スポーツ行事の企画・運営」をする人は、スポーツの楽しさを追求

する事が極めて多く、基本的な技術には関心が低い。「広報活動・参加者集め」に関係する人は、標本数が少なく、考察が十分とはいえない。しかし、スポーツの楽しさをねらいとする人が多く、基本的な技術を重視する人は少ないといえる。これらは、0.1%の水準の有意差が認められた。

スポーツ指導場面で采配を振う「監督・コーチ」は、基本的技術や試合に伴うルール・マナーなどの教育的側面については前述した。監督・コーチの補佐役を担う「部長・マネージャー」は、ルール・マナーを教えるという事よりも集団内の人間関係を円滑にする役割を果たす。スポーツの楽しさを追求する指導者は、スポーツ教室や運動会などの行事の企画・運営でスポーツ活動を住民に提供する役割をもっている。そのため、スポーツ技術を求めたりする人は少ない。人間関係を大切にする指導者は、広報活動や参加者を集め、マネージャーなどの世話役である。これらは、対人関係に重点をおき、スポーツ組織など集団の保存ないし維持機能の役割である。

3. 住民のスポーツ指導者像

地域住民は、この1年間にどの程度スポーツ指導を受けたであろうか。被スポーツ指導経験者は56.5%、被スポーツ指導無経験者は39.6%、被スポーツ指導拒否者3.9%である。スポーツの指導を希望とする住民が全体の96.1%と高率を示している。ここではスポーツ指導者を希望する者はどのような指導方針をもった指導者に指導を受けることを希望しているかについて考えてみる。

(1) 運動・スポーツの好きになった動機と求める指導者像

被スポーツ指導経験者が運動やスポーツが好きになった動機は、過去のスポーツに対する運動・スポーツ活動場面の快感や不快感に左右されることが大きい。住民は、どのようなスポーツ活動場面でスポーツが好きになったのであろうか。住民のスポーツが好きになった場面は、「友達や仲間との遊びやスポーツ」「学校のクラブ活動」「地域のスポーツクラブ」「学校の体育授業」「テレビで見たスポーツ」「兄弟や家族との遊びのスポー

ツ」「学校の運動会や行事やスポーツ」「学校の休み時間や放課後遊びやスポーツ」の順である。

性別では、男性が女性より影響力の大きいのは、「友達や仲間との遊びやスポーツ」である。女性が男性より影響の大きいのは、「学校の体育の授業」「兄弟や家族との遊びやスポーツ」である。また、「運動やスポーツは嫌い」と答えた者は男性より女性に多い傾向がある。

年齢別では、10・20歳代に多いのは、「友達や仲間との遊びやスポーツ」「学校のクラブ活動」である。しかし、中・高年齢者になるに従い減少する。30・40歳代に多いのは、「地域のスポーツクラブ」であり、10・20歳代には少ない。また、「学校の体育の授業」は、10・40・50歳代に多い。高年齢層に多いのは、「テレビなどのスポーツ」があり、高年齢層になるに従い多くなるものは、「運動・スポーツは嫌い」である。

被スポーツ指導経験者と被スポーツ指導無経験者を比較すると、被スポーツ指導経験者に多いのは、「学校のスポーツクラブ」「友達や仲間との遊びやスポーツ」「地域のスポーツクラブでのスポーツ」「学校の体育授業」である。一方、被スポーツ指導無経験者に多いのは、「大きな大会やテレビなどみたスポーツ」「学校の運動会などの行事」「兄弟や家族との遊びやスポーツ」で、この両者間は0.1％水準で有意差が認められた。また、特に両者間で大きな差のあったものには、被スポーツ指導経験者は、「学校のスポーツクラブ」が多く、被スポーツ指導無経験者には、「運動やスポーツは嫌い」が多かった。

表5は、住民のスポーツ指導希望者の運動やスポーツが好きになった動機と住民が求める指導者のクロス集計である。

「学校の体育の授業」が動機づけになった住民は、人間関係を大切にするやスポーツ以外の世話をしてもらえる指導者を望んでいる者は多い。しかし、スポーツの楽しさは全体よりもやや少ないといえる。「兄弟や家族との遊びのスポーツ」で運動やスポーツが好きになった住民は、ルール・マナー、スポーツ以外の世話をしてくれるが高いといえる。ファミリース

表5　運動やスポーツが好きになった場・影響と指導者像　(%)

動機＼指導者像		基本的な技術	スポーツの楽しさ	ルール・マナー	人間関係	ある程度高度な技術	スポーツ以外の世話
体育の授業	N＝273	17.2	34.8	9.5	26.4	4.4	7.7
兄弟や家族との遊びスポーツ	N＝226	12.8	36.3	15.5	23.9	3.5	8.0
友達・仲間との遊びスポーツ	N＝1016	16.1	39.3	12.6	24.1	3.4	4.5
学校のクラブ活動	N＝637	17.1	40.5	9.3	20.6	10.2	2.3
地域でのスポーツクラブでのスポーツ	N＝273	23.1	39.2	6.6	21.6	4.4	5.1
テレビなどのスポーツ	N＝259	16.2	36.3	8.5	22.8	5.8	10.4
学校の運動会などの行事	N＝162	9.2	36.5	13.6	34.7	3.0	3.0
休み時間放課後遊びスポーツ	N＝140	18.7	35.9	8.6	24.5	3.6	8.7
その他（嫌い）	N＝154	9.1	46.1	3.3	31.2	1.9	8.4
全体	N＝3139	16.2	38.7	10.4	24.1	5.1	5.5

P＜0.001

ポーツとも言われるこのスポーツでの指導者は、基本的技術よりも、スポーツで楽しく遊ぶ方法や、そのための用具、器具の準備などを世話してくれる人を望んでいる。「友達や仲間との遊びやスポーツ」で好きになった動機の住民は、全体の平均に近く特別な特徴はみられない。しかし、これらの住民は、遊びの中からスポーツの楽しさや技術を求め、スポーツの社会化へと進んでいるのではないだろうか。「学校のクラブ」で好きになった動機の人は、ある程度高度な技術が多く、スポーツ以外の世話、人間関係を大切にするは少ない。運動部の対外試合で勝負を競う目標を持っているため、人間関係は集団の維持指向するうえに基礎的に必要であろう。そうすると人間関係は円滑であるという条件は満たされていよう。人間関係を求める指導者は関心は低いと思われる。「地域でのスポーツクラブでのスポーツ」で好きになった住民は、基本的技術が多く、ルール・マナー、人間関係を大切にする指導者を求める人は少ない。スポーツクラブの活動は、定期的活動で学校のクラブと同様に技術的指向であり、人間関係は円

滑であると考えられ、ゲーム・試合にもある程度経験があるため、ルール・マナーを望む指導者は少ない。

「テレビなどのスポーツ」で運動・スポーツが好きになった住民は、スポーツ以外の世話をしてくれる指導者を求めているといえる。

スポーツ経験の浅い人は、スポーツに関心が低い人であるのか不明である。しかし、スポーツ活動場面周辺での交流を求めていることは確かである。「学校の運動会などの行事」でスポーツが好きになった住民は、基本的な技術よりも人間関係、ルール・マナーなどの指導者を求めている。スポーツの楽しさを求めているより、人との触れ合う心理的満足感や社会的行動による人間関係を求めているのではないか。「休み時間や放課後の遊びやスポーツ」で好きになった住民は、積極的なスポーツ参加のタイプとはいえず、スポーツ以外の世話を求めている。テレビなどを見たりするタイプと同様な指導者を望んでいる。「運動やスポーツは嫌い」という住民は、スポーツ技術やそれに伴うルール・マナーを教えてもらうよりも、スポーツの楽しさ、人間関係、スポーツ以外の世話の指導者を求めている。身体的な活動の効果をねらいとする指導者よりもむしろ社会的にいろいろな経験を重視する指導者を求めている。

運動やスポーツが好きになった動機の場や影響は、地域（41.4%）、学校（38.7%）、家庭（15.5%）の3つに区分できる。

地域での特徴は、基本的な技術とスポーツの楽しさを指導する指導者を多く望んでいる。また、学校では、人間関係やある程度高度な技術の指導を多く望んでいる。一方、家庭においては、父母・兄弟が指導的立場であるが、ルール・マナーやスポーツ以外の世話をしてもらえる指導者を望む傾向である。

住民が求める指導者像別にみると、基本的技術を重視する指導者を望む住民がスポーツが好きになった動機は、地域でのスポーツクラブのスポーツが多い。一方、学校での運動会などの行事は少いことがいえる。スポーツの楽しさを重視する指導者を望む住民の動機づけは、学校でのクラブ活

動が多く、学校の体育授業が少いことである。学校の自由意志によるスポーツ活動のクラブ活動で楽しいという動機になった住民は、学校教育活動の教科としての体育の授業で楽しいという動機づけになった住民より多い。同じ指導者は学校の教師であるが、授業の身体活動と自由意志のクラブ活動による身体活動の違いがここにも出ている。

ルールやマナーを教えてくれる指導者を望む住民がスポーツが好きになった動機は、兄弟や家族との遊びやスポーツ及び学校での行事が多く、地域でのスポーツクラブでのスポーツ教室が少ない。ファミリースポーツは指導者的役割を果たすのは父母になりがちで、スポーツ指導者という自負心は薄く、スポーツ活動場面におけるルールやマナーに不安を抱いているのであろう。人間関係を重要とする指導者を望む住民がスポーツが好きになった動機は、学校の運動会、クラスマッチなどの行事が多く、学校のクラブ活動は少ない。基本的技術よりさらに高い水準の技術を指導する人を望む住民がスポーツが好きになった動機は、学校のクラブである。前述のように対外試合により勝敗を重視する目標があるからである。一方、学校での行事、友達や家族でのスポーツ活動は少ないといえる。スポーツ活動を離れた場での世話もしてくれる指導者を望む住民がスポーツを好きになった動機は、家庭でテレビを見たり、学校の休み時間や放課後のスポーツ活動、ファミリースポーツなどが多い。少ないものには、高度な技術や対外試合をする学校のクラブ活動がある。

(2) スポーツ活動のタイプとスポーツ指導者像

早朝のジョギング、キャッチボール、家族でのハイキング、地域でのスポーツ教室などいろいろ活動のタイプがある。

活動タイプ別で多い順では、「地域のクラブ」17.2%、「友人」15.5%、「家族」10.5%、「地域の行事」8.2%、「1人」8.1%、「職場の行事」7.1%、「職場のクラブ」5.2%、「学校の行事」2.9%、「学校のクラブ」2.9%、「その他・DK」22.5%である。

性別では、男性が女性より多い活動タイプは、「地域のクラブ」「友人」

「地域の行事」「１人」「職場の行事」「職場のクラブ」「学校のクラブ」であり、女性が多い活動タイプは、「家族」「学校の行事」である。

年齢別では、「地域のクラブ」は、30・40歳代に多く、若年層、高年層になるに従い減少する。「友人」のタイプは、10・20歳代に多く、その後、中・高年齢層になるに従って減少している。「家族」は、30・40歳代に多く、高年齢層は少ない。「地域の行事」は、30・40歳代に多い。「１人」は、50歳代から急に多くなり、30歳代には少ない。「職場のクラブ」は、40・50歳代が多く、次いで30歳代である。「職場の行事」は、20・30歳代が多く、中・高年齢者は少ない。「学校の行事」「学校のクラブ」は、10歳代が中心である。

表６　スポーツ活動のタイプとスポーツ指導者像　(%)

活動タイプ ＼ 指導者像	基本的な技術	スポーツの楽しさ	ルール・マナー	人間関係	ある程度高度な技術	スポーツ以外の世話
１　人　N＝336	14.6	33.1	8.0	32.1	3.6	8.6
家　族　N＝448	14.7	43.5	10.3	26.1	1.3	4.1
友　人　N＝628	20.1	38.7	9.6	20.4	7.3	3.9
職場のクラブ　N＝194	20.1	33.0	16.0	18.0	9.3	3.6
職場の行事　N＝291	14.4	34.4	12.0	30.2	2.8	6.2
学校のクラブ　N＝121	21.5	28.9	9.9	19.0	16.5	4.1
学校の行事　N＝122	15.6	41.8	6.6	22.9	5.8	7.3
地域のクラブ　N＝522	18.4	39.5	12.5	17.8	7.3	4.5
地域の行事　N＝269	14.1	41.3	9.7	24.5	3.0	7.4
全　体　N＝2931	17.1	38.1	10.6	23.4	5.6	5.2

P＜0.001

表６は、スポーツ指導を求める住民のスポーツ活動のタイプとスポーツ指導者像のクロス集計である。活動のタイプと望む指導者像の全体を比較すると、「１人」で活動するタイプの人は、人間関係、スポーツ以外の世話が多く、スポーツの楽しさ、基本的な技術、ルール・マナーを大切にす

るは少ない。「家族」のタイプは、スポーツの楽しさ、人間関係が多く、基本的技術、ある程度の高度な技術は少ない。「友人」のタイプは、基本的技術、ある程度の高度な技術は多く、スポーツ以外は少ない。「職場のクラブ」のタイプは、基本的技術、ルール・マナー、ある程度の高度な技術が多く、スポーツの楽しさ、人間関係、スポーツ以外の世話は少ない。「職場の行事」のタイプは、人間関係、ルール・マナーは多く、基本的技術、ある程度高度な技術は少ない。「学校のクラブ」のタイプは、基本的技術、ある程度の高度な技術が多く、スポーツの楽しさ、人間関係は少ない。「学校の行事」のタイプは、スポーツの楽しさ、スポーツ以外が多く、ルール・マナーは少ない。「地域のクラブ」のタイプは、ルール・マナー、ある程度高度な技術は多く、人間関係は少ない。「地域の行事」のタイプは、スポーツの楽しさ、スポーツ以外の世話が多く、ある程度高度な技術は少ない。これは統計的に0.1%水準の有意差が認められた。

行事（1日行事）のタイプとしての学校での運動会やクラスマッチ、地域の運動会や球技大会などの1日行事は、スポーツ活動で汗を流し、肉体的な満足感や、勝負を競う楽しさ、特に勝った時の歓喜、負けた時の悔しさ、それに地域では、久しぶりのスポーツで衰えた体力を再認識し、隣近所の人々と共に話し、又は、反省会で知らない人を知る。その場でスポーツ以外で子供の教育、他人の仕事の話、スポーツの反省を交えての交流からもくる世間話など多種多様である。

クラブ（地域、職場、学校）で活動のタイプの共通点は、対外競技があり、競技会での勝利を目的とするための基本的技術やより高いレベルの技術のマスターである。競技会で勝つことの喜びは、平素の練習で基礎的練習は当然ながら人間関係も含まれる。したがって人間関係を強く求めたり、スポーツ活動そのものの娯楽的な楽しさを指導者に求めたりしない。

また、より高い技術指導を求むのに「友人」がある。意識的に同レベルの「友人」は、クラブで求める指導者像と同様である。技術の高い友人からの指導は、気楽に依頼できる利点を持っている。

「1人」で活動するタイプで求める指導者は、人間関係を大切にとりあつかってくれる人や、スポーツ以外の世話を気楽にしかもまめにしてくれる親切な人であろう。

4. 各タイプ別スポーツ指導者の目標と住民の指導者像のズレ

指導者と住民との具体的な指導者像のズレをここでは考察してみる。住民はどんなタイプの人に指導を受けたのであろうか。多い順にみると、「クラブのコーチ・仲間」「友人・先輩」「学校の先生」「体育指導委員」「体育協会の役員」「スポーツ指導員」「スポーツ施設の指導者」「コミュニティスポーツリーダー」の順である。広島県教育委員会調査[31](1975年)と比較して、増加してきたのは、「友人・先輩」であり、減少傾向には、「体育指導委員」がある。

調査項目と調査数の関係上から指導者像は、基本的技術、スポーツの楽しさ、ルール・マナー、人間関係を重視している指導者に分けた。また、指導者は、「体育指導員」「スポーツ指導員」「学校の教師」「体育協会の役員」「コミュニティスポーツリーダー」とした。この各タイプ別指導者と住民とのズレを表にしたものが表7である。

① 体育指導委員の指導目標と住民の求める体育指導委員像のズレ

体育指導委員の役割は、昭和32年文部次官通報ではプロモーターとしての機能を重視していた。昭和36年のスポーツ振興法には、住民のスポーツ普及・振興に必要な実技指導とスポーツに関する指導助言を意味している。さらに、昭和47年の保健体育審議会答申では、市町村の体育・スポーツ事業の企画に参画し、推進者としての任務を重視するようになってきた。このように体育指導委員の役割は、プロモーターからプランナー、オーガナイザーへと変遷してきた。

「体育指導委員」の指導目標で多い順は、スポーツの楽しさ、基本的技術、ルール・マナー、人間関係である。「住民が求める体育指導委員像」では、スポーツの楽しさ、基本的技術、人間関係、ルール・マナーの順である。「体育指導委員」が住民より指導に力を入れているのは、ルール・

表7　タイプ別指導者の目標と住民が求める指導者像　(%)

タイプ＼指導者像			基本的技術	スポーツの楽しさ	ルール・マナー	人間関係	有意差
体育指導委員	A	N＝163	25.8	35.0	23.9	15.3	***
	B	N＝171	18.7	52.0	9.9	19.4	
スポーツ指導員	A	N＝95	45.3	37.9	8.4	8.4	***
	B	N＝99	23.2	36.4	18.2	22.2	
学校の教師	A	N＝133	48.1	16.5	27.8	7.6	***
	B	N＝205	14.6	46.4	10.7	28.3	
体育協会役員	A	N＝206	38.8	34.9	17.5	8.8	***
	B	N＝113	23.0	45.1	9.7	22.2	
コミュニティスポーツリーダー	A	N＝66	51.5	12.1	25.8	10.6	***
	B	N＝37	13.5	38.8	13.5	34.2	

A……スポーツ指導者の指導の目標　　＊＊＊……P＜0.001
B……住民が求めるスポーツ指導者像

マナー、基本的技術があり、住民が体育指導委員に求めるには、スポーツの楽しさがある。この両者間に0.1%水準の有意差が認められた。

ルール・マナー、基本的技術、スポーツの楽しさにズレを生んでいることになる。このギャップを体育指導委員という公的立場の枠内で埋めるかは今後の課題である。体育指導委員は、プロモーターからオーガナイザー、プランナーという立場の移行はしてはいるが、全員がオーガナイザーやプランナーである必要はない。ある者はプロモーターとし、ある者はプランナーであってもよいわけである。スポーツ活動場面から離れた体育指導員は、本来の主旨にそぐわない指導者となっている。スポーツ活動場面に近い距離の体育指導委員が多くなる事が必要である。

②　スポーツ指導員の指導目標と住民の求めるスポーツ指導員像のズレ

日本体育協会のスポーツ指導員制度は、昭和44年度からであるからトレ

ーナー制度（昭和40年）より後である。トレーナー制度の役割は、競技力向上の立場からであるが、スポーツ指導員制度は、地域における住民を対象とした指導者で、高度で専門的技術よりも初歩的な指導や健康管理、安全管理に重点をおいた地域スポーツ指導員[32]である。

「スポーツ指導員」の指導の目標は、基本的技術、スポーツの楽しさ、ルール・マナー、人間関係の順である。基本的技術の実技指導が中心であるところに特徴がある。住民が求める「スポーツ指導者像」は、スポーツの楽しさ、基本的技術、人間関係、ルール・マナーとなる。この両者間に0.1％水準の有意差が認められた。

スポーツ指導員は、“スポーツ教室の指導を”という体育協会の提唱であるようにスポーツ指導員は実技中心の役割を担っている。しかし、住民は、技術指導よりもスポーツの楽しさや、人間関係やマナーなどのスポーツ活動だけに限らず、日常生活における社会的な行動にもその範囲を広げてもらいたいと望んでいるとも思われる。

③　学校教師の指導目標と住民が求めている学校教師像とのズレ

学校の教師は、中・高等学校、クラブ活動の顧問で、しかも、中・高等学校体育連盟の役員を、ここでは取りあげた。役員となれば各競技において、競技成績で一定の実績を残した人、又は、競技種目の世話を長年した教師である。「学校の教師」の指導目標は、基本的技術、ルール・マナー、スポーツの楽しさ、人間関係の順である。特に基本的技術は48.1％と高率で技術中心になっている。一方、住民が地域スポーツ活動で「学校の教師」に求めるのは、スポーツの楽しさ、人間関係、基本的技術、ルール・マナーの順である。この両者間には0.1％水準で有意差が認められた。

「学校の教師」は、学校のクラブ活動では基本的技術を重視し、基本的技術から技術水準を高める過程は自然な成り行きである。

しかし、住民が学校の教師に望むのは、基本的技術やルール・マナーよりスポーツの楽しさや人間関係が強いと言える。学校の教師は、学校で指導するのは学校教育としての目的意識を明確に持っていることである。

しかし、住民は、“遊びの観点からスポーツをとらえている”点の違いがあり、教師と住民とのズレが生じているのは他の指導者より大きいのも特徴である。

④　体育協会役員の指導目標と住民が求める体育協会役員像とのズレ

体育協会役員は、県・市町村体育協会及び県・市町村競技団体の役員である。具体的には、実技指導を中心とする競技力の向上や対外的試合を行うチームの指導者、運営に携さわる者などである。「体育協会役員」の目標は、基本的技術、スポーツの楽しさ、ルール・マナー、人間関係の順である。「住民が求める体育協会役員」は、スポーツの楽しさ、基本的技術、人間関係、ルール・マナーの順である。この両者間には0.1％水準で有意差が認められた。体育協会役員より住民の求める体育協会役員像は、スポーツの楽しさと人間関係を大切にするである。スポーツ活動場面での指導を重視する体育協会の役員に対し、スポーツ活動現場のみならず、試合が終了したり、競技会が終了した後でも、スポーツ行動にかかる事にも指導や世話を求めているともいえよう。

⑤　コミュニティスポーツリーダーの指導目標と住民が求めるコミュニティスポーツ指導者像とのズレ

スポーツ行政では、地域に即応するスポーツの普及・振興に努め、その成果も大きいものがある。そして指導者の養成や確保にも努めてきた。指導者の指導効率を高めるねらいとして指導者を登録するリーダーバンク制度が一部の県・市町村で実施されている。「コミュニティスポーツリーダー」は、スポーツ行政で養成された者もあれば、民間団体が養成した指導者もある。「コミュニティスポーツリーダー」の目標は、基本的技術が過半数を占め、ルール・マナー、スポーツの楽しさ、人間関係の順である。一方、住民の求めるコミュニティスポーツリーダー像は、スポーツの楽しさ、人間関係、、ルール・マナー、基本的技術の順で、両者間には0.1％水準で有意差が認められた。

「コミュニティ・スポーツリーダー」は、実技指導型でスポーツ活動の

現場で機能をしているのに対し、住民が求めるコミュニティリーダー像は、スポーツ活動現場からやや離れたスポーツ活動の周辺の社会との関わりをも含んでいるところにギャップを生じている。

これらの各指導者の指導目標と、住民の求める指導者像の大きなズレをみると、基本的技術は、「コミュニティスポーツリーダー」「学校の教師」「スポーツ指導員」「体育協会の役員」である。スポーツの楽しさは、「学校の教師」「コミュニティスポーツリーダー」である。ルール・マナーでは、「学校の教師」「体育指導委員」である。人間関係では、その指導者は「コミュニティスポーツリーダー」「学校の教師」である。

Ⅳ. 結　語　(おわりにかえて)

以上のことから次のように要約できる。

1.　スポーツ指導者の指導目標

○スポーツ指導者のスポーツ活動目的と指導目標では、「運動不足・体力」の人は、スポーツの楽しさ、基本的技術が多く、「仲間づくり・人間関係」の人は、スポーツの楽しさ、基本的な技術をねらっている人が多い。また、「人間形成・精神力」の人では、基本的技術の指向が強い。

○スポーツ指導頻度と指導目標では、「週レベル」の人は、基本的技術が多く、「月レベル」「年レベル」の人は、スポーツの楽しさ、ルール・マナーが多くなる傾向が強い。

○スポーツ指導者への動機と指導目標では、「経験を生かす」「選手を育ててみたい」「スポーツ好き」の積極的型は、基本的技術が多い。また、「青少年健全育成」「推せんされて」など消極的型は、基本的技術が多い。また、「青少年健全育成」「推せんされて」など消極的型は、スポーツの楽しさ、人間関係が多い傾向が強い。

○スポーツ指導へのかかわり方と指導目標では、「監督・コーチ」「部長・マネージャー」のスポーツ活動が場面に直接関わる人は、基本的技術が多く、「スポーツ行事の企画・運営」などスポーツ活動の裏方的役割を

担う人は、スポーツの楽しさが多くなる傾向がある。

2. 住民の指導者像

○住民の運動やスポーツが好きになった場・影響と求める指導者像では、「地域のスポーツクラブ」の組織的活動は、基本的技術、「学校のクラブ」は、ある程度の技術、「テレビなどのスポーツ」は、スポーツ以外の世話をする、「兄弟や家族との遊び・スポーツ」は、ルール・マナーを教えるが多い傾向がある。

○住民のスポーツ活動のタイプと求める指導者像では、「学校の行事」「地域の行事」の行事タイプは、スポーツの楽しさが多い。「学校のクラブ」「職場のクラブ」「地域のクラブ」のクラブタイプは、基本的技術が多く、また、「1人」は、人間関係、スポーツ以外のことが多い傾向がある。

3. 各タイプ別指導者と住民との指導者像のズレ

各タイプ別指導者の指導目標と住民が求める指導者像のズレは、「体育指導委員」はルール・マナーに、「スポーツ指導員」は基本的技術、「学校のクラブの教師」は、基本的技術、スポーツの楽しさ、ルール・マナー、人間関係に、「体育協会の役員」は、基本的技術、「コミュニティスポーツリーダー」は、基本的技術、スポーツの楽しさにそれぞれ大きなズレを生じている。

今回は、各タイプ別指導者のスポーツ活動周囲について検討することができなかったので次回に委ねることにする。

本研究の要旨は、日本体育協会第33回大会（1982.10.17. 於東京大学）で発表した。

本稿は、広島大学総合科学部助教授　荒井貞光先生の懇切丁寧なる御指導と広島社会体育調査研究会からデーターの提供をいただいたものである。ここに記して深く感謝致します。

（1982.10.25）

引 用・参 考 文 献

1）平松　携「農村のコミュニティスポーツに関する事例研究」尾道短期大学研究紀要第28集、1979年、p.155
2）平松　携「コミュニティスポーツの振興に関して—西ドイツの市民スポーツの現状を通して—」尾道短期大学研究紀要第29集、1980年、p.69
3）平松　携「コミュニティスポーツの振興に関して（Ⅱ）—都市住民のスポーツ施設利用と満足度に関する研究—」尾道短期大学研究紀要第30集（1号）記念号、1981年、p.195
4）平松　携「コミュニティスポーツの振興に関して（Ⅲ）—広島県のスポーツ行政施策を通じて—」尾道短期大学研究紀要第31集（1号）、1981年、p.117
5）平松　携「コミュニティスポーツの振興に関して（Ⅳ）—尾道市民のスポーツ行動の現状と課題—」尾道短期大学研究紀要第31集（2号）、1982年、p.23
6）文部省　レクリエーションサービスに関する調査研究報告書、昭和50年
7）中村　平「運動施設の誘地距離に関する研究」体育学研究22巻第2号、1977年、p.93
8）神　文雄「Community —特に公共スポーツ施設—」岡山女子短期大学研究紀要17号、1973年、p.19
9）金崎良三「社会体育指導者の条件・役割の検討」体育・スポーツ指導者の現状と課題、道知書院、昭和51年、p.84
10）堺　賢治・藤原　誠　家庭婦人バレーボールに関する研究—家庭婦人のクラブ参加とコミュニティ活動—第32回日本体育学会大会号、1981年、p.205
11）徳永敏光　家庭婦人バレーボール・クラブにおける競技志向、第32回日本体育学会大会号、1981年、p.214
12）藤田匡肖「地方都市におけるスポーツ活動に関する事例研究—Ⅰ—津市家庭婦人バレーボール調査から—」三重大学教育学部研究紀要第24巻第4号、1973年、p.43
13）藤田匡肖「地方都市におけるスポーツ活動に関する事例研究—Ⅱ—津市民プール利用に対する調査から—」三重大学教育学部研究紀要第25巻第4号、1974年、p.47
14）古畑和孝　リーダーシップ、社会心理学、東京大学出版会、1971年、p.153
15）岡堂哲雄　指導者とリーダー、集団力学入門、医学書院、1974、p.161
16）大橋正夫　社会心理学概論、朝倉書店、昭和44年、p.122
17）大橋　幸　世界大百科事典、平凡社、p.362
18）伊藤安二　社会心理学、国土社、1975年、p.241
19）金崎良三　前掲示
20）金崎良三「社会体育指導者の指導行動とその規定要因に関する社会学的研究」体

育学研究第23巻第1号、昭和53年、p.47
21) 金崎良三「社会体育指導者の社会的機能に関する研究」九州大学体育学研究第5巻第5号、1977年、p.53
22) 金崎良三「スポーツ少年団指導者に関する社会学的研究」九州大学体育学研究第5巻第1号、1973年、p.1
23) 金崎良三　社会体育指導者の指導行動に関する研究（1）第32回日本体育学会大会発表資料、1981年
24) 沢田和明　コーチのリーダーシップに関する基礎的研究、第32回日本体育学会大会資料、1981年
25) 杉原厚夫・粂野　豊　ライフステージ別にみたスポーツ指導者の指導活動のちがい、第28回日本体育学会大会号、1977年、p.142
26) 犬飼義秀　地域別（都道府県）にみたスポーツ指導者の職業構成とその指導活動のちがい、第28回日本体育学会大会号、1977年、p.144
27) 山本英毅・中島豊雄「新しい社会体育指導者像—社会体育指導者の活動と意識に関する調査結果から—」体育・スポーツ指導者の現状と課題、道和書院、昭和51年、p.58
28) 木村国次「社会体育指導者の現状」体育・スポーツ指導者の現状と課題、道和書院、昭和51年、p.157
29) 金崎良三　前掲示
30) 荒井貞光　スポーツ人間学、大修館、1981年、p.270
31) 広島県教育委員会　広島県民の体育・スポーツに関する調査、1975年
32) 薗田碩哉　生涯スポーツ、プレスギムナスチカ、1977年、p.353